



ホトケノザ



ハルジオン



ニワゼキショウ



ウマノアシガタ



ヒメオドリコソウ



カラスノエンドウ



シャガ

## “雑草と呼ばないで”

## ～ 野の花たち @ ほたるの森 ～



オオイヌノフグリ



コバンソウ



チチヨグサ



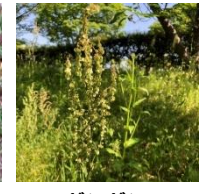
オオジシバリ



マツバウラン



オッタチカタバミ



ギシギシ

## ふりかえり

## 環境学習会から見えてきたこと

前資料館館長 眞田善之

令和2年度は環境学習会を2回開催し、令和3年度8月末に市内の河川でホタル飛翔調査員の方々の交流会を企画しましたが、コロナ禍の影響で開催できませんでした。ようやく12月の第1回の環境学習会では、古川副館長から過去20年間の最大飛翔数の変化の話や、守山学区・川中自治会の方からほたるの取り組みについてお話を聞き、様々な取り組みを通して守山のホタルの生息状況は一定維持されているものの、ホタルの自生する環境としては、かなり問題のある状況にあることを見えてきました。また、3月開催の第2回目の学習会では「ゲンジボタルとまちづくり」と題した、吉身学区の貴重な取り組みについてのPJリーダーの下田義春さんのお話を聞き、昨年度吉見学校

区の浮気町内や立入町内の河川で大量のホタルの乱舞が見られたのは、こういった地道な地域の取り組みの成果だと納得しました。

この2年間の環境学習会から見えてきたことは、市民がホタルに関心を持ち、ホタルと共存できる環境とは何かを自ら考えることが大切だということです。そのためには、もっと多くの参加者を募り共に学び考える行動できる機会が必要になります。

これからは、特に子どもたちやその保護者を対象にしたテーマや内容の学習会に親子で参加してもらう工夫をしたいと思います。



## 私と蛍 研究室担当 中村 悟

私と蛍の関わりは、43年前に守山市河西ニュータウンに引っ越した頃に始まります。その頃はニュータウンの中の鳩の森公園に大きい蛍ゲージがあり、蛍が乱舞していることに感動しました。その後、蛍ゲージは撤去され公園内で蛍がみられなくなり何とか復活できないかと模索していた時に、ほたるの森資料館のホタル講座を知り受講しました。講座でホタルの飼育・自然環境（ホタルが住める河川環境）などを学んだことから、自宅で蛍の飼育を始めてみました。1年目はなかなか上手にいかず資料館の方にご指導いただきました。もう7年目になります。いまだに、蛍の飼育はあまりにも奥が深く難しいと感じておりますが、今は自宅と守山ホタル研究室で職員としても、ホタルの飼育をしています。



## ほたるパパの一口メモ

### Q.気になるホタルの歩き方のわけ

A ホタルの幼虫には足がいっぱいあるように見えるね。でも、体の横にある16本の足みたいなのは酸素を取り込むエラ管。足は、昆虫だから6本だけなんだ。でも、足の後ろのお腹が長くて歩きにくいのでお尻の先に尾脚（びきやく）というのがあってね、これで体を押しして尺取り虫のように歩くんだ。水中で育った幼虫が春にさなぎになるために上陸する時は、コンクリートの壁を上って先の土の部分をめざして30m以上も歩いた記録もあるそうだよ。成虫の歩き方は他の昆虫と同じだけれど、一生のうちに水陸空といろんな所で暮らせるすごい昆虫なんだよ。(S.N)

